

## ◆堀田家への進退

23歳 土屋伊予守の家 改易となる。

堀田正俊に推挙され 26歳3月出仕

28歳秋 事件（貞享元年8月28日 若年寄稲葉正休が、大老堀田正俊を江戸城中で刺殺）があり、嫡男正仲殿が継ぐ、不幸なことが続き、家臣たちも禄米を減らされ、辞職したものも多かった。白石は不幸な時に去るべきではないと出仕を続けていた。

この時、経書・歴史などを読み漁る。ついに蓄えもなくなり、辞職願を出す。

## ◆明卿（あきのり）誕生

堀田の殿は「どんなことがあっても、我が家を去ることは思いとどまってほしい」と仰られたが、元禄4年白石35歳 秋 明卿誕生。その後、白石の辞職願が聞き入れられた。

## ◆市中で私塾を開く

家に残る財産を勘定すると、銭3貫文、白米3斗 すぐには飢え死にしないだろう。浅草に家を借り移り住む。堀田下総守の弟様から、浪人の間家族の生活費だけは出してもらえた。35歳秋の末に本所に移転私塾を開く。

## ◆加賀への士官を友人に譲る

木下順庵先生が白石を加賀前田家に推挙しようとしてくれた。加賀の人で岡島が「加賀に年離れた母がいますので、なんとか先生の推挙をいただくよう申しあげてください」と頼まれたので、岡島に加賀への士官を譲った。（36歳）

## ◆甲府に出資するきっかけ

37歳の冬 高力伊予守忠弘（天和3年、新たに甲府jはんに召し出され、3千俵を給わせられる。当時、小姓組の番頭）が、木下先生のところに来て、「門下で優れた人をお尋ねしてこいと、戸田長門守忠利（当時 甲府藩の家老）が申しております」と言われ、先生は白石の名を出す。やりとりの後、12/7 先生が伊予守に手紙を出して、お受けすることになった。

後になり、甲府藩邸では、大学頭林信篤の弟子を推挙してほしいとの事であったが、信篤は「推挙する弟子はおりません」と答え、長門守の計らいで、船橋半右衛門（当時 吉田藤八郎 伊藤仁斎の弟子であった）を大学頭の門人ということにして薦め、その後白石を採用するよう言ってこられた。

12/15 夜藩邸に参上して、家臣にする由を伝えられる。

## ◆お目どおり後はじめて進講する

12/18 はじめて綱豊侯にお目どおりし、12/26 初めて『大学』を進講した。

元禄7年(37歳)正月 綱豊侯は「これまで『四書』を講義させたことが全部で3度、『小学』『近思録』それぞれ1度あるが、まだ聖人の道がどういうものであるか明らかにすることができない。今後どのように学ぶべきか」と問われ、白石は「四子の本に十分書かれております、聖人の原理・法則を詳しく知ろうとされるならば、『五行』を並行して勉強されるのが良いでしょう」と答える。

#### ◆『詩経』の進講

綱豊侯は「まず『四経』と『礼記』から始めるとおっしゃり、『四経』の講義を白石に命じた。元禄7(37歳)年2月1日 白石の長女が天然痘にかかり死去、長男も天然痘になる。そのため、2/13より『四経』の講義が始まる。元禄7年11/20に進講すること162日で終わる。

#### ◆『書経』と『通鑑綱目』の進講

元禄8年(38歳) 1/24『書経』が始まり、1/28『通鑑綱目』開始 12/21に完了

#### ◆『春秋』の進講

元禄9年(39歳) 1/26『春秋』の講義開始 合わせて『通鑑綱目』も講義する。6年かかり元禄14(45歳)年12/19完了

#### ◆『藩翰譜』を作り進講したこと

『書経』の講義の終わった元禄13年(44歳) 12/21に「国初以来、俸禄1万石以上の人々の事を書き記して差し出せ」と言われ 元禄14年1/11に正式に命じられた。

諸家の事跡を調べ上げ、7/11起稿、11月脱稿

慶長5年から延宝8年まで80年間の 諸侯が初めて封土をもらい、受け継ぎ、あるいは取りつぶしに合うものなど、全337家にわたる。正編10巻、付録2 凡例・目録合わせて1巻 合わせて13巻を20冊に分けて元禄15年(46歳) 2/19進呈する。

これより前に、上様が『藩翰譜』とつけられた。

#### ◆家宣侯の好学

『詩経』の講義を始めて以来、將軍のくらいにつかれた後、白石がお使いで京都に登った時と、朝鮮の使節の応接を承った時以外は19年間、講義をした。 経書・歴史・諸子百家の書物は、残るところなく精通された。日本や中国の古今において、これほどまでに学問を好まれた君主の話は聞いたことがない。

#### ◆和漢の書目をたてまつる

元禄8年(39歳) 秋 いつもそばに置いてご覧になるべき和漢の図書目録を提出するよう仰せられ、差し出すと、「それらの本を買い求めるように」と言われ、和漢の書百数十部を差し上げた。

## ◆書物を下賜される

元禄8年（39歳） 12/21 侍講2人（白石と吉田唐八郎）に和漢の書二百部の目録に「それぞれ、欲しい署名に印をつけて提出せよ」と仰られた。吉田は2/3ほどの印をつけた、白石は残りを見て、11部に印をつけ。それぞれ望むように任せると言われた。白石には六経の書を「これは年来自分が大切にしてきた本だ。おまえの子孫に伝えるが良い」と仰られて下された。

## ◆下賜された金で鎧を作る。

元禄9年（40歳） 正月初め、特別に下賜された本を木下先生にご覧に入れると、序を作ってくさった。

元禄11年（42歳） 9/6火災のため白石の家が焼け落ちたことを聞き、9/9に仮の家を立てるために費用として黄金50両を頂戴した。家来のうち火災にあった者が多い中で、白石だけだった。白石が家を建てることもできたが、火災はしばしばある。お志を無駄にしない何か良い考えはないかと思い、鎧一領を作らせた。死を持って特別の御恩に報いるべき時に使おうと考えた。

## ◆木下先生の死

元禄11年（42歳） 12/23 白石が初めの火災にあった日の夜、亡くなられた。遺言により葬儀などを榊原玄輔と、とりしきった。享年68

## ◆御講書始め

毎年正月の初めに御講書初めの儀式があり、終わると、季節の服を2重ねいただくことは、最後まで変わらなかった。

## ◆日講のこと

藩邸に居られた頃から、将軍になられた後も、年頭に御講書始めがあり、1/15過ぎてから日講が始まり12月末まで大事故がないがきり、毎日講義を中止されることはなかった。白石の体を思い、暑い時は、日が暮れてから参上せよといい、寒い時には昼間 火鉢を別に置いてくれた。当日雨や雪の時は、使者に出仕を止められた。

講義にはきちんとした服装で臨まれ、暑くても扇を取らず、夜が老けて蚊が多くなっても追われることはなかった。これほどの様子だから、講義が2時間以上になったが、物静かなままであった。

## ◆特別の恩寵

毎年春と秋に下屋敷におられるときは、お供して、酒や菓子などを頂き、人々に詩を造らせることもあった。季節ごとに衣服の類を下賜され、年末にはそれぞれ黄金・白銀などを下さり慰労されたことは毎年変わらなかった。将軍職に就かれても最後まで変更されなかった。

お世継ぎの位に支えた宝永2年（49歳）の春、白石には美しい反物を妻子に与えるよう頂き、夏にも同じように単の反物を頂木、折びつに入れたお菓子も度々頂戴した。これが毎年の恒例となり、家継様が御代継がれた後も同じようにいただいた。  
これらは、白石以外の進講者にはなかったと、人々は噂していた。